

さよならの向こう側



報恩講は真宗門徒にとつては新しい年の始まりと言われます。今日からまた聞法の道を皆様と共に歩み、いのちについての問いをたずねていけたらと思います。

法話後の席では講師の清谷師から「南無阿弥陀仏は相対性理論だ」とのお話しも飛び出し、頭も身体もフル回転の一日となりました。

十月二十四日 徳泉寺報恩講を無事に勤修いたしました。気持ちの良い青空が広がり爽やかな空の下、多くの方のお力添えで報恩講をお迎えできたことを大変ありがたく感謝申し上げます。前日より同朋会員の方を中心にご準備いただき、当日も朝早くから駆けつけていただいて、年に一度のこの法要を大切にお参りいただきました。私達は温かいご縁に守られているのだなあと再確認させられました。体調に不安があったりして、普段はなかなかお会いできない方々も「報恩講だから」とお運びくださり、お寺で再会できたことを喜び合いました。また御門徒以外の方にもお参りいただき、勤行にも法話にも初めて触れていただけただけでも大変嬉しいことでした。

報恩講 勤修いたしました

徳とく泉せん寺じ報ほう

No. 96

発行

令和7年10月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区

榴岡3-10-3

(022)297-4248

tokusenji.sendai@gmail.com

[ai@gmail.com](mailto:tokusenji.sendai@gmail.com)



ホームページ

[tokusenji-](http://tokusenji-sendai.com)

[sendai.com](http://tokusenji-sendai.com)



Instagram

[tokusenji.sendai](https://www.instagram.com/tokusenji.sendai)



TOKUSENJI.SENDAI



清谷師のご法話も三年目となりました。昨年は「名前を呼ぶ」をテーマにお話しくださいましたが、今年はその後に続いて時間も空間も越えて「私に届く声」というお話しをいただきました。さよならの向こう側に何かあるのか考えさせられ、また死して尚残せるものがあるのかと安心をいただけるようなお話でした。

法話 清谷真澄 師

(岩手県北上市通來寺御住職)

親鸞聖人の選び取られた仏「阿弥陀仏(アミダブツ)」は「無量寿、無量光」とも訳され「量りのない命、量りのない光」という意味で親鸞聖人はお受けとめになつておられます。

歌手山口百恵さんが引退前最後に歌った『さよならの向こう側』という歌。この歌は「何億光年輝く星にも 寿命があると 教えてくれたのは あなたでした」という歌詞から始まります。私たちが今、見ている星の光は何億年前に出発して今、私のところまで届いた光です。その光を発した星は、今はもう消滅しているかもしれない。宇宙はその広さと時間の深さを同時に見せてくれます。私たちの命にも寿命があります。どんな人も必ずこの世から消滅してしまふ。そうしたとしても、何年何十年経っても亡くなった方の光、願い、祈りが縁のあった人のところに届けられることがある。さよならには向こう側があるのです。私たちには雲が掛かっているか、気つかないかもしれない。その雲がさつと払われた時、届く。それが無量寿、無量光。私も両親の声がふつと聞こえることがあります。「勉強してるか。」「野菜食べなさいよ。」と。

2500年前のお釈迦様の声が800年前に親鸞聖人に届いた。この感動をうたったのが『正信偈』です。そして今日、仙台のここ徳泉寺でご縁をいただいで、みなさんのもとに届いたのです。全文をホームページに掲載しています。